



SCAR QUEENDOM

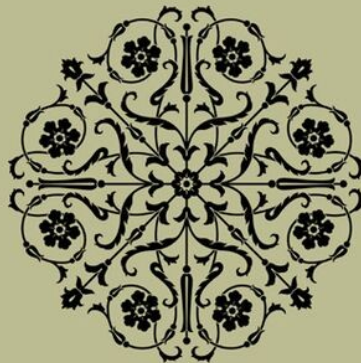
スカー・クイーンダム

朽techS - 2017

MATURE CONTENT



∴始祖ドラゴン	∴太陽喰らいの宿敵
∴血塗れ人鳥Ⅹ	∴名前の海を持つ薔薇
∴女王陛下の幽鬼	∴青調の雷獣
∴クラリモンドのオディール	∴デラモルテのオデット
∴ネルガルの門の殻獣	∴空拒みのカササギ
∴埋葬夢の聖者	∴毀月の骨胎
∴無垢掃いの献身	∴傷跡の女王



われわれは、さまざまな仮定のもとに進んで行かねばならない

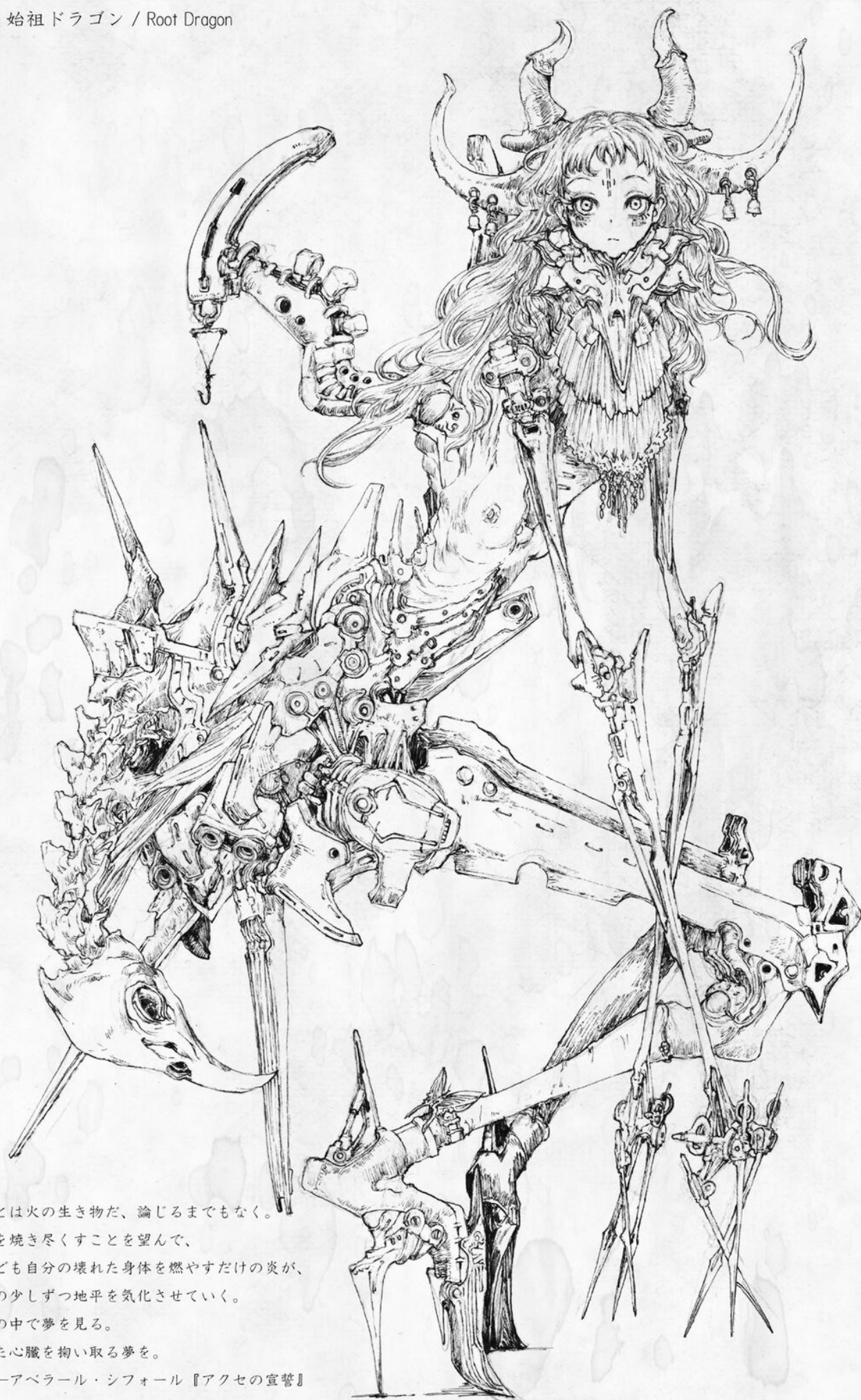
——自分たちが期待して生きていける何かがあるという、

あるいはわれわれのアップグレードされた死には究極の目的があるという、

あるいはいつかは何かをなし遂げる”ことができるという、

あるいは正しく死ぬことで目的達成の手がかりを得られるのだという、仮定のもとに。

——チャイナ・ミエヴィル『〈新死〉の条件』



少女とは火の生き物だ、論じるまでもなく。
世界を焼き尽くすことを望んで、
けれども自分の壊れた身体を燃やすだけの炎が、
ほんの少しずつ地平を気化させていく。
蒸気の中で夢を見る。
溶けた心臓を掏い取る夢を。

——アベラール・シフォール『アクセの宣誓』

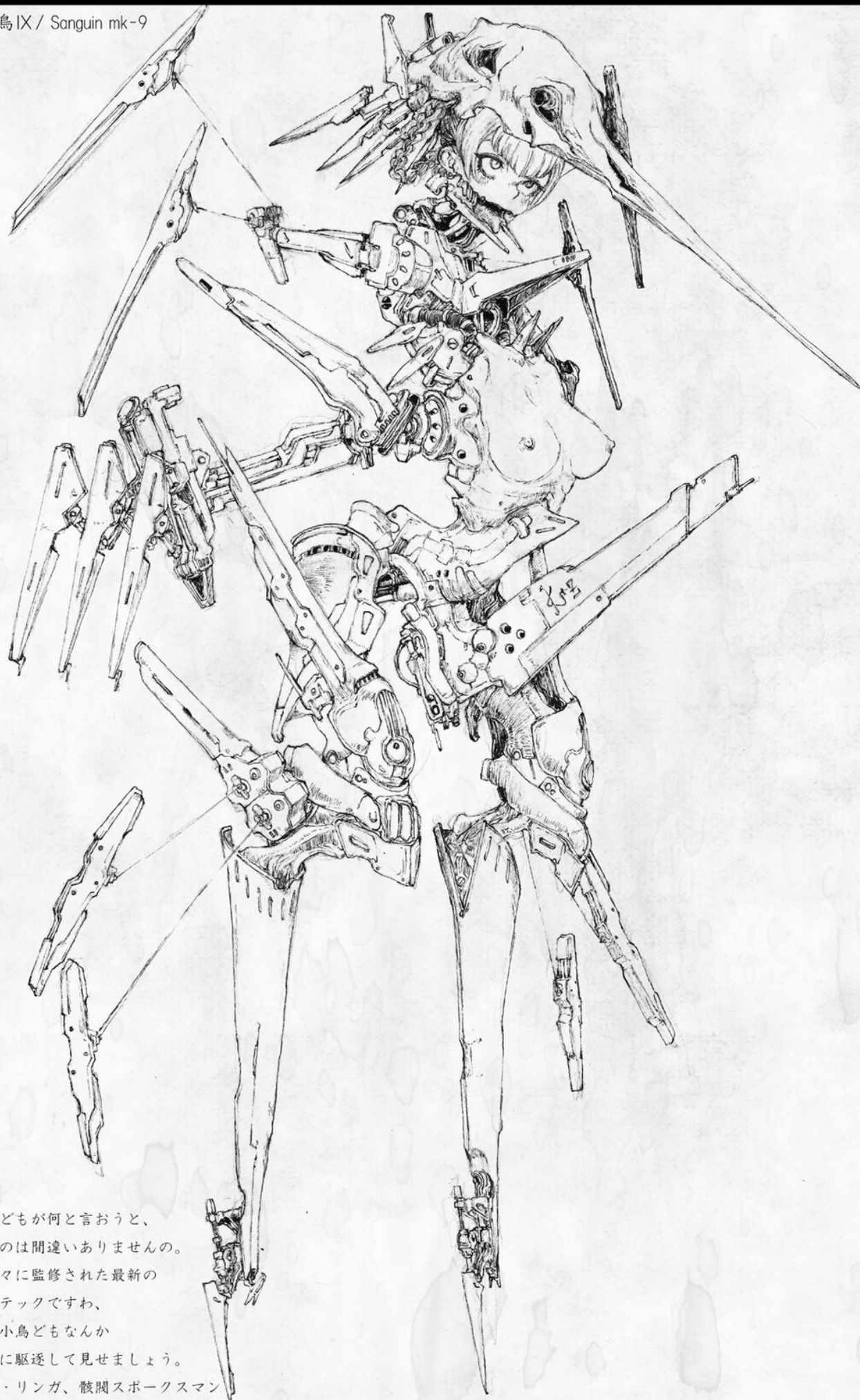
ラシ・メザマレク財団の本拠地、ヤクブ・グロブリンが
紫の騎士の”白き環”でガニメデ軌道に転移させられた、
その余波は太陽系全域に及んだ。

何より問題となったのは、グロブリンの生体建材が
癌化して自己複製と変異を繰り返し生まれた

“白薔薇フラクタル”とその苗矢体による、
相次ぐ木星生存圏のライフライン寸断だった。

——『ナ・グの騎士のレポート』





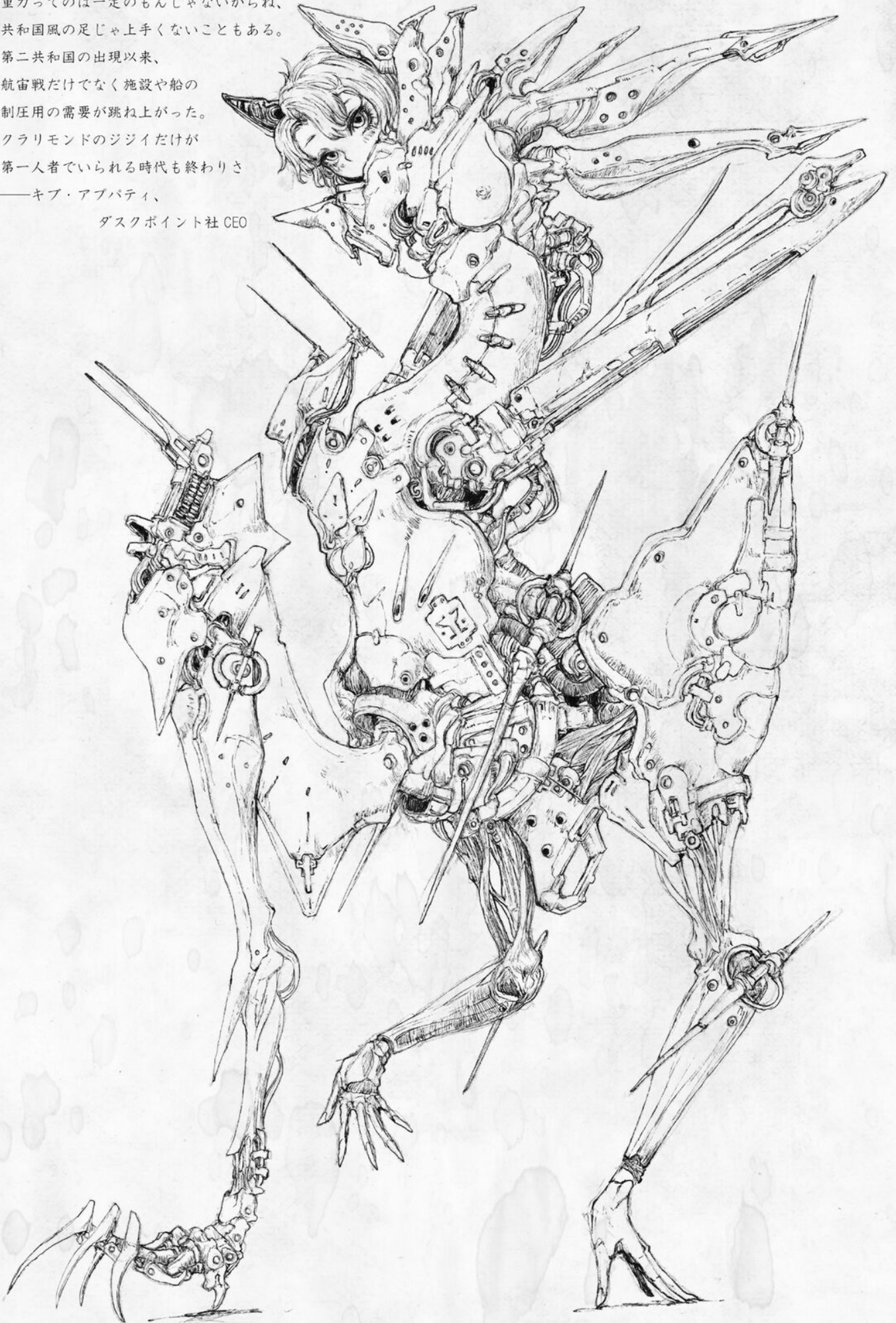
火星の田舎者どもが何と言おうと、
ウチが本場なのは間違いありません。
ゾフィー様直々に監修された最新の
空間型ネクロテックですわ、
女王代行領の小鳥どもなんか
あっという間に駆逐して見せましょう。

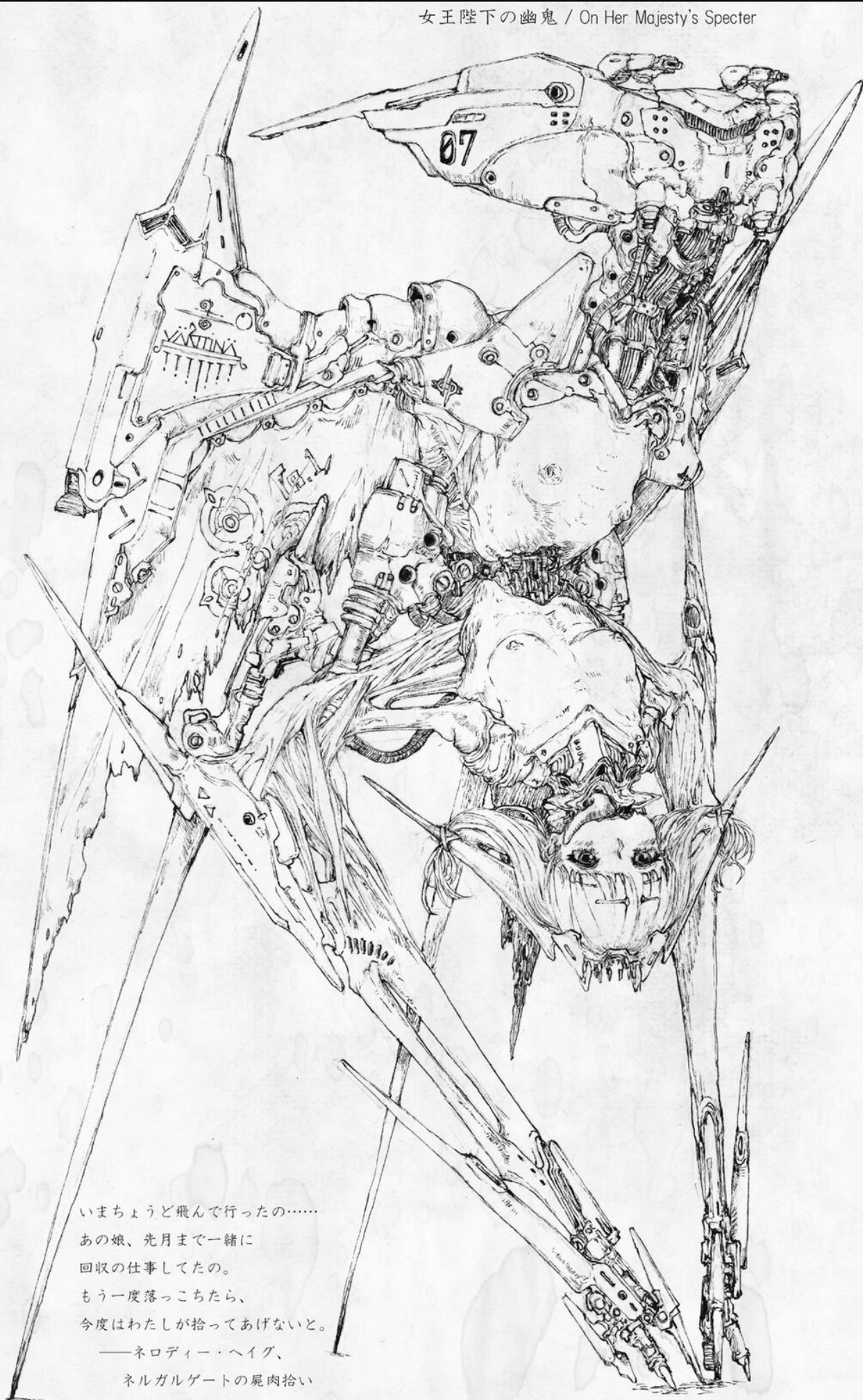
——ファリ・リング、骸閼スポークスマン

重カってのは一定のもんじゃないからね、
共和国風の足じゃ上手くないこともある。

第二共和国の出現以来、
航宙戦だけでなく施設や船の
制圧用の需要が跳ね上がった。
クラリモンドのジジイだけが
第一人者でいられる時代も終わりさ
——キブ・アブパティ、

ダスクポイント社 CEO





いまちょうど飛んで行ったの……
あの娘、先月まで一緒に
回収の仕事してたの。
もう一度落っこちたら、
今度はわたしが拾ってあげないと。

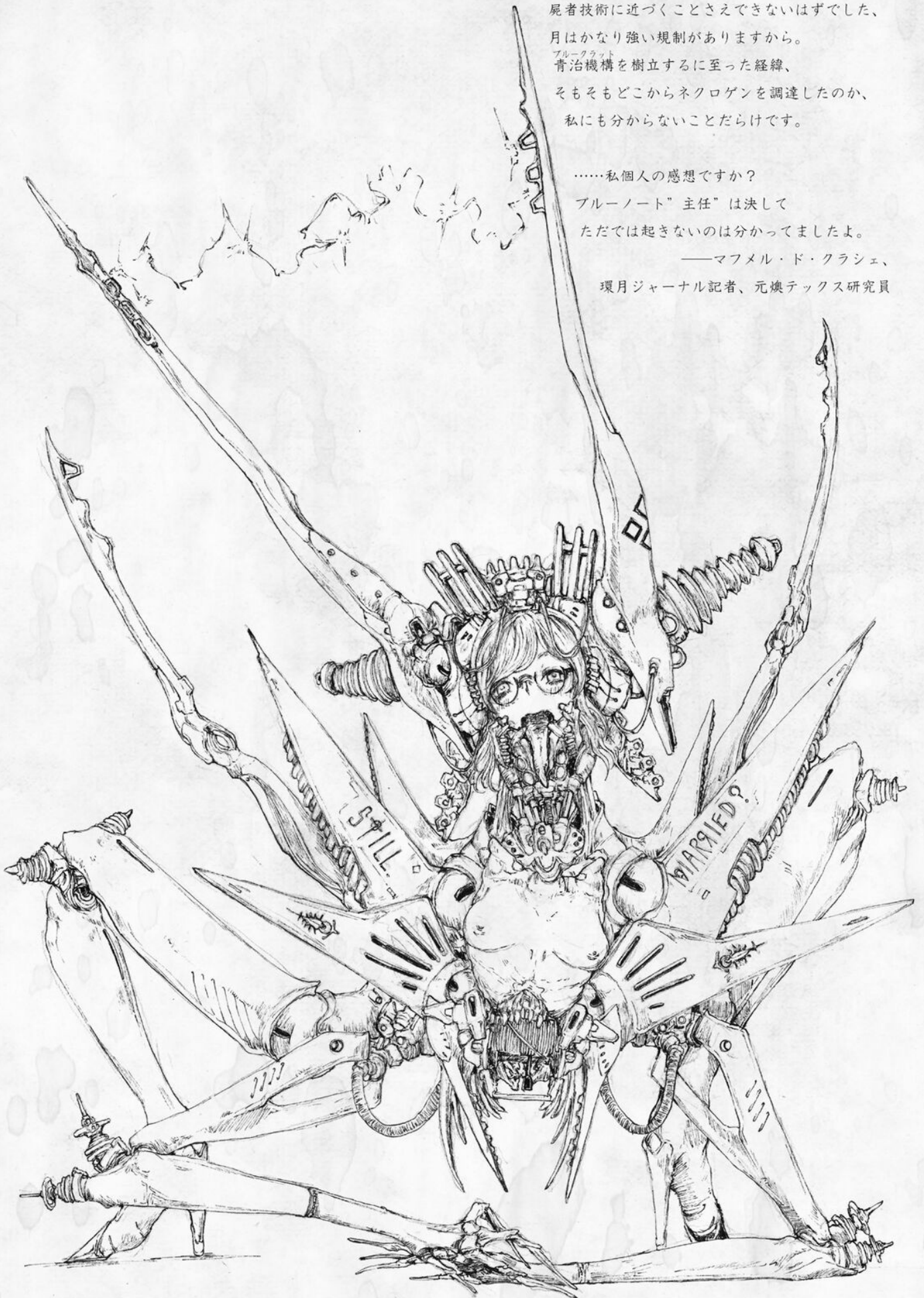
——ネロディー・ヘイグ、
ネルガルゲートの屍肉拾い

ブルーノートは派閥争いに敗れて焔を追放され、
月の財団施設の監督官に降格されたんです。
屍者技術に近づくことさえできないはずでした、
月はかなり強い規制がありますから。
ブルークラフト
青治機構を樹立するに至った経緯、
そもそもどこからネクロゲンを調達したのか、
私にも分からないことだらけです。

……私個人の感想ですか？

ブルーノート”主任”は決して
ただでは起きないのは分かってましたよ。

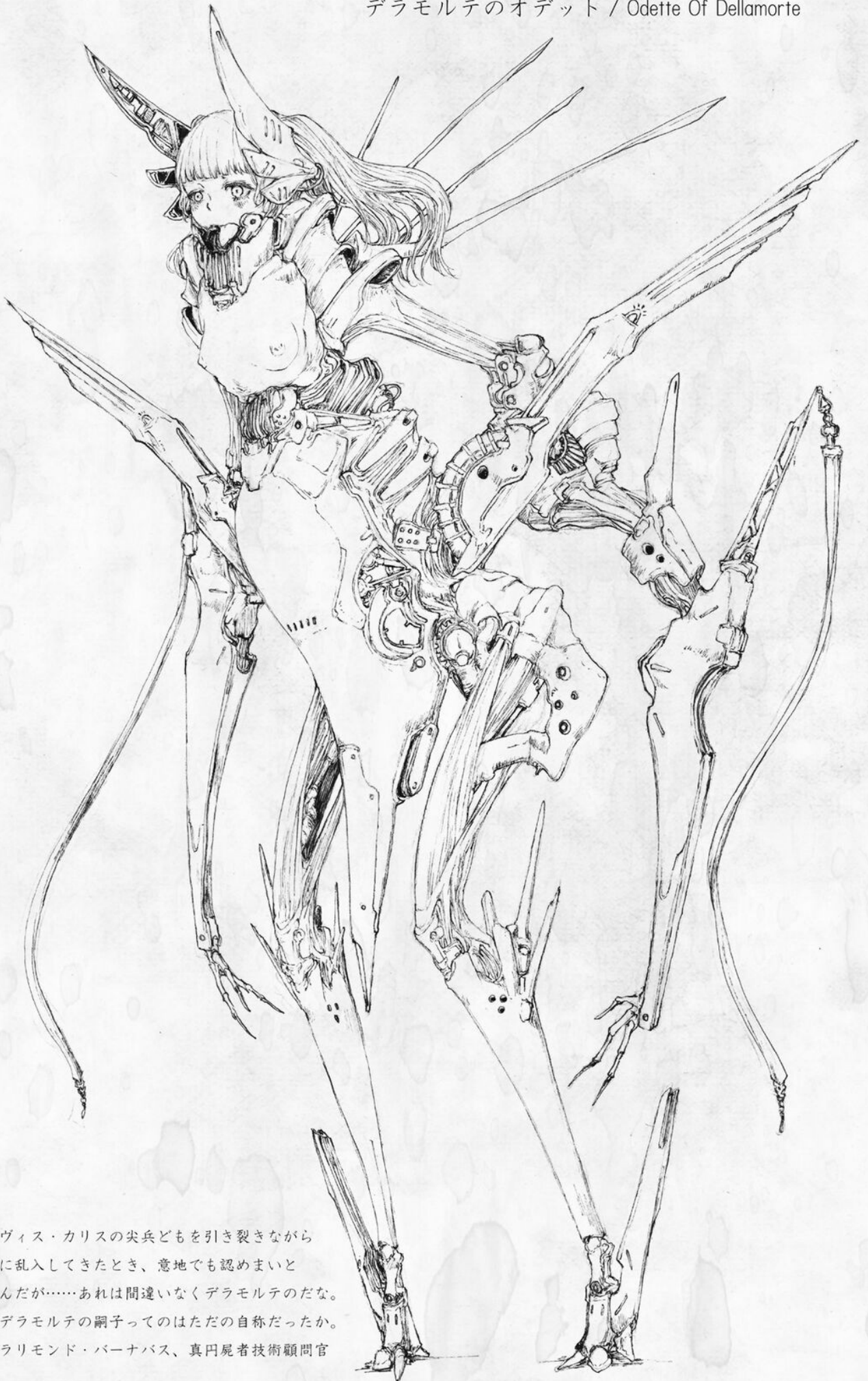
——マフメル・ド・クラシェ、
環月ジャーナル記者、元焔テックス研究員



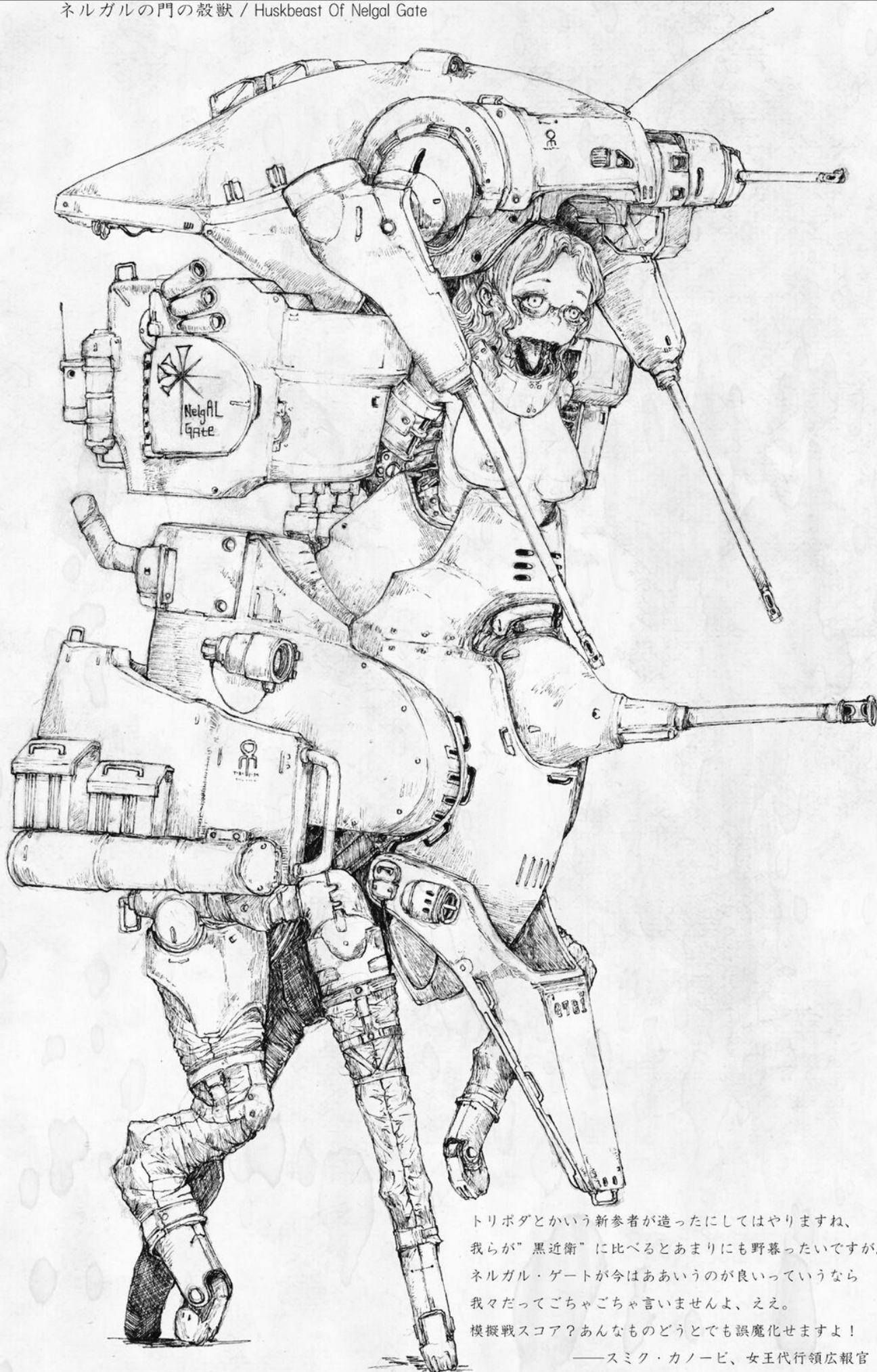


「あの日」のオータム・クロンダイクに似せてるって意見もあるがね、クラリモンドはそういうセンチメンタリズムが一番嫌いだと思うよ。ともかく、彼の街いには何年経ってもつつい乗っかってしまうのさ。

——カシウス・デラモルテ、最後のマスター・ネクロテック

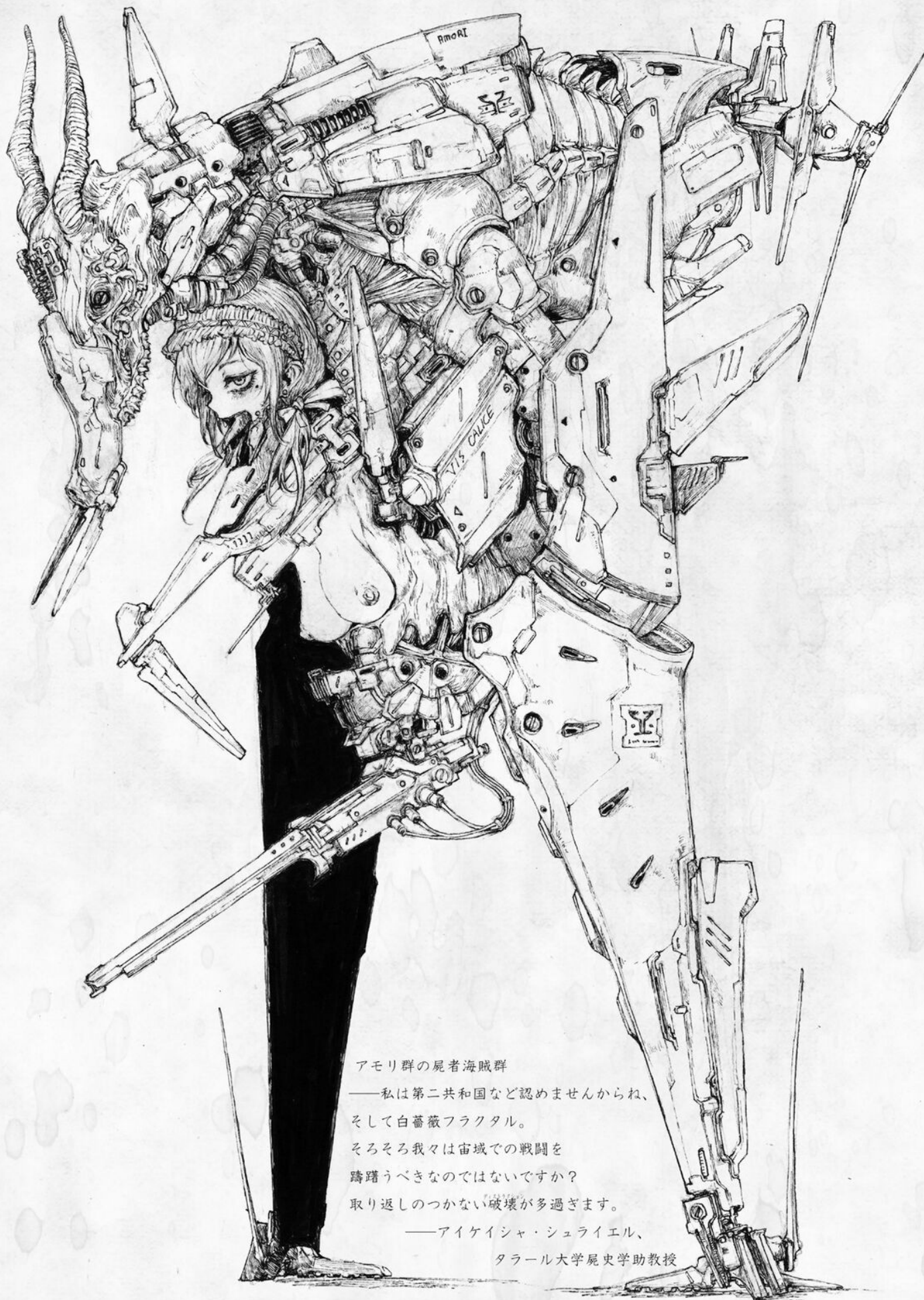


アレがヴィス・カリスの尖兵どもを引き裂きながら
ドラムに乱入してきたとき、意地でも認めまいと
思ったんだが……あれは間違いなくデラモルテのだな。
連中、デラモルテの嗣子ってのはただの自称だったか。
——クラリモンド・バーナバス、真円屍者技術顧問官



トリボダとかいう新参者が造ったにしてはやりますね、
我らが“黒近衛”に比べるとあまりにも野暮ったいですが。
ネルガル・ゲートが今はああいうのが良いっていうなら
我々だってごちゃごちゃ言いませんよ、ええ。
模擬戦スコア？あんなものどうとでも誤魔化せますよ！

——スミク・カノービ、女王代行領広報官



アモリ群の屍者海賊群

——私は第二共和国など認めませんからね、
そして白薔薇フラクタル。

そろそろ我々は宙域での戦闘を
躊躇うべきなのではないですか？

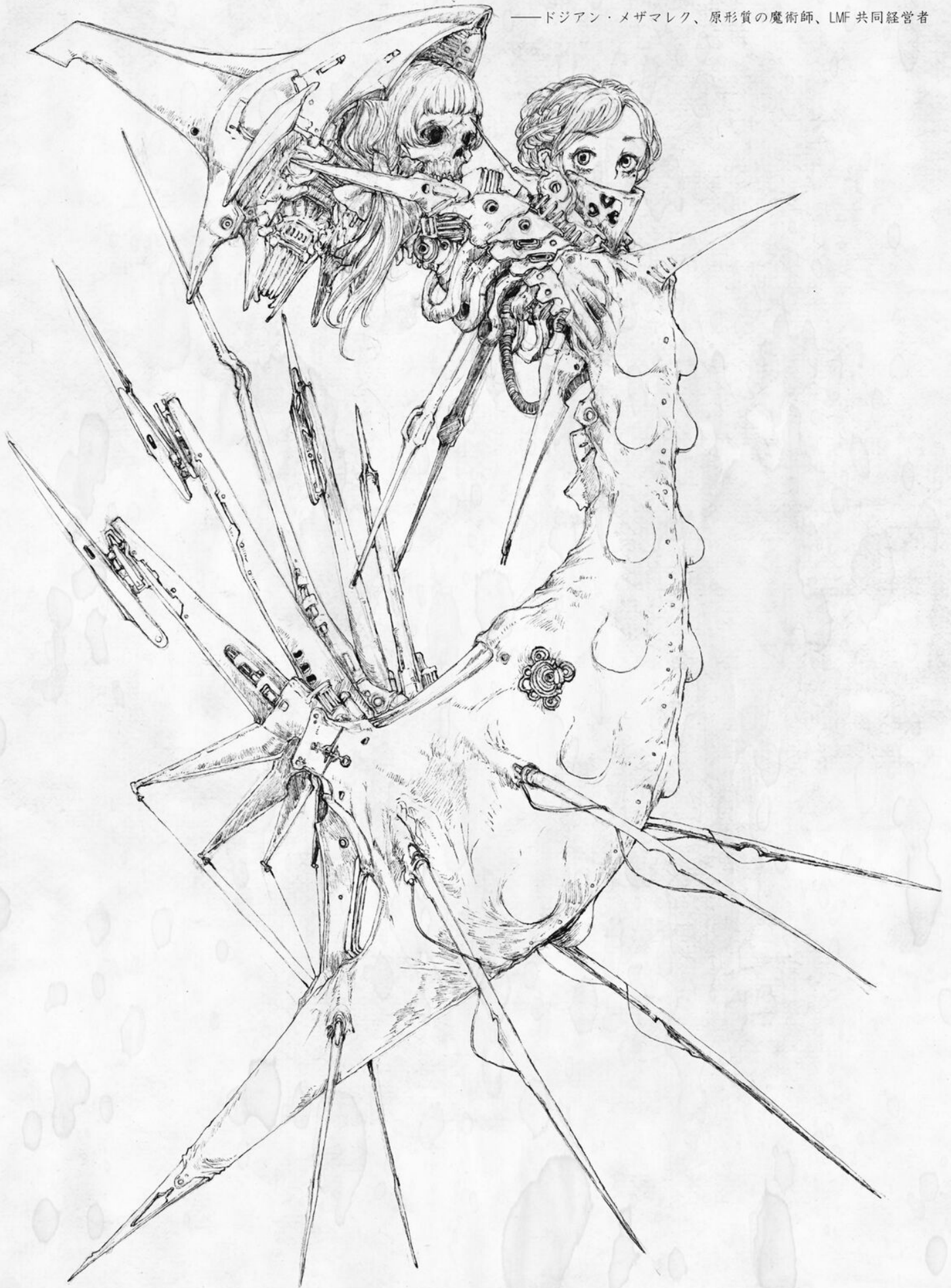
取り返しのつかない破壊が多過ぎます。

——アイケイシャ・シュライエル、

タラール大学屍史学助教授



「赤い冬を食る蝗、
白い春に群がる蟻」
——黒回廊の騎士、
ヴァッター・ヴェンデ 最期の句



シャイツェン・コリダーの崩壊系で、屍者の乳を飲んで
育った子供の話を知っているか？それが俺さ。

——スィカ・アズレフ、環月の“麻薬王”





屍者たちはその輝ける破れ目ゆえに、
情弱な傷つき方とは無縁だ。

——貪食者オールドー

俺の痛み——それ自体反芻するに値する痛み

——Marilyn Manson 「Devour」

毎度毎度のことでありますが、困難の中で屍者と向き合い続ける私を支えるのは、
親しい人々と忘れ得ぬ肯定的な傷跡の数々でありました。
癒えるべきでない傷、癒えて欲しくない傷、そういうものが分かる感覚を
持ち続けられなければ、たぶん描き（書き）続ける意味もないのです。

傷つかなきゃリアルではない、みたいな話ではないしそういうことを言うのは
無責任だと思うのですが、生きる上で必然的に負いうる傷というのは確かにあり、
あとはそこに意味を創り出せるかどうか、みたいなところを延々自問しつつ
手首と腰を痛めました。

痛手から立ち直りたいということと、癒されたいと思うことは全く別で、
治癒とはあくまで自分自身の新陳代謝だよな、そこを外注しちゃマズいのでは、
みたいに思うところもあり、敢えて言わなければならないのであれば
「安らぎが欲しい」と私は表現すべきなのかなとか。

とりとめもないおしゃべりですね。

またお会いできたら良いなど心から思っではいるのですが、

何を言いたかったのかすぐ分からなくなってしまいます。

申し訳ない。

それでは皆様お元気で、

Beneath The Mire

泥濘の底より、愛をこめて。

——メグリム・ハルヨ

奥付

『スカー・クイーンダム』

2017/05/06 COMITIA120にて発行

作者：メグリム・ハルヨ（朽techS）

連絡先：horuyoi@hotmail.co.jp

pixivID:133923

印刷所：ねこのしっぽ（有）さま

過去作アーカイヴス電子版はこちら▼

<https://booth.pm/ia/items/151352>

